平和学習プリント

年　月　日

沖縄戦の時、・シゲさんはどうやってきったのか

６年　　　　組　　　　　番

名前

みなさん、引き続き、について考えましょう。いろいろな疑問がたくさん出てきましたか。この授業は、少しでもみなさんにたくさんの？をつくることが目標です。みなさんと同じくらいの年にをされた方が「どうやって生き残ったのか」一緒に考えてみましょう。さんと、姉のシゲさんの話を読んでみましょう。

**当時の学校教育**

私が入学した頃の学校名は第二大里小学校（現在のの前身）だったが、昭和16（1941）年頃に戦争がしてから校名がに変わった。 教科書も「ススメ ススメ ヘイタイススメ」などのなだった。

はボロボロだったが、「（・の写真）」 をするはコンクリートでにられていた。登校するとまず「」といって、のを向いてをした。も使うだけでスパイいされたので、 日本語（）で話すようされていた。

日本人はみんなの（子ども）であり、敵であるアメリカとイギリスの（）と戦うには（すべての日本人がすること）だ、ということが学校教育や国全体のスローガンになっていた。

**を手伝う**

昭和19（1944）年に日本兵が学校をとして使用するようになってからは、児童は学校を追い出されてムラヤー（）で授業を受けた。

１、２時間くらいは授業をしたが、3時間目からは日本軍のの手伝いをさせられた。

高学年（５、６年生）はをる作業だった。この辺りのはクチャ（のの土）なので、いりやすかった。男子生徒がショベルやツルハシ（当時はジュウジと呼んでいた）でり、女子生徒はザルやモッコなどで土を運び出していた。は午後５時ごろまで続き、やのあたりなど、いくつもの場所のをった。

**との交流**

昭和20年に入ると兵隊がされ、の公民館や民家にもがする様になった。では8の家がになり、私の家にも8人のがいた。のでにれていた私は、よく我が家の馬(３頭いた)に乗っていた。軍人の中で馬に乗れるのはぐらいだったため、たちから「さん」というあだ名をつけられた。

その時、姉のシゲさんは

3月1日から23日までの間、わが家にずっといたのは三人ので、その中の一人にのさんという、当時25歳のしいのがいた。

日本兵は昼間はりなどの作業を行っていたが、夜は自由だったようで各家庭に遊びに行っていた。私の家にも遊びに来ていて、変な歌を教えてくれるなどして楽しい時間を過ごした。3月23日にアメリカ軍の攻撃が始まるまでは、このような生活をしていた。

**日本兵にを追い出される**

昭和20年３月２３日、この日は学校のやの日だったが、アメリカ軍からのが始まった。家にしていた兵隊はこの日に家を出て行った。食料はやなど、えていたものをの中に持っていき、夜になると畑に行ってをるなどしてした。

５月２３日には私の家のに日本兵がやってきて、を出るように言った。った母は「ここを出ても行く当てはないし、どこに行けばいいのかも分かりません。さんしてください。子どももいて、こんなの中で出て行っても終わりだから」とに言ったが、「軍の命令はのだ。のにするはだ」と言われた。 母はいてし、「出ていく準備をするから」とだけ時間をもらった。を出たらいつどこで誰が死ぬかも分からないし、はぐれてしまうもあるので、親が死んでも生きられるよう、 一人一人のかばんと（背中に負うかばん。リュックサック）に、塩、黒砂糖、砂糖、やパン、（に大事にしていた）などの食料とお金を入れ、をかぶり、翌日にを出た。

5月27日はなので、日本軍のが助けに来てくれるとしていた。だがそれどころではなく、アメリカ軍がどんどんにしてきていた。

ここまでの証言を読んで、さんとのについてまとめてみよう。

**・でを**

6月16日頃の朝早い時間、を作るためにをるときの「ギリギリギリギリ」というのようなが聞こえた。の外を見ると、USAと書かれたのがまっていた。出て行ってアメリカ兵にまるのはだと言われていたので、を決めてしようということになった。

したチョウソウというおじさんはで、だった時にを2つもらっていた。 の使い方は学校でも教わっていて、一つはのため、もうーつはに投げるためのものだった。このにアメリカ軍が入ってきたらをしようとしたが、 アメリカ軍は道の下にっていた私たちのに気がつかなかったようで、の上を通りぎていった。

その時姉のシゲさんは

みんなを持っていて、「どうせ死ぬから」ということでも考えたが、私の母親がにしたこともあってなきをた。

**に荷物をわれる**

　でしている、をけてが空いた水タンクにれている日本兵がいた。きをされ、「いつも追い出されてばかりなのにありがたい」と思って入って行った。日本兵からは水ももらったので、おにかばんの中のを少し分けた。

6時頃になり、アメリカ兵が近くに来ているということでげようとしたが、持ち歩いていたかばんがくなっていることに気が付いた。「兵隊さん、僕のかばんは？」と聞くと「誰がそんなの分かるか！」と言われた。本当は助けるために呼んだのではなく、かばんのがしかっただけなのだとこのとき分かった。

**をびかけた人の**

6月20日は朝からが全く無かった。約三カ月の間、 このようなことはなかったので「おかしいな、どうしたんだろう」と思っていた。ギーザバンタにはいめられたがたくさん来ていた。朝6時半頃、ののの丘には、暑かったのでのアメリカ兵が百人ほどんでいるのも見えた。

するとアメリカ軍がいるところから、ふんどしでを持った30代くらいの沖縄のおじさんが一人、こちらに向かってやってきた。はということなので、みんながそうに彼を見ていた。彼は「私はアメリカ軍のになって、に入っている。皆さんを助けるためにこのを持ってきた。男はふんどしで、女はだけでい。ではももする。私がこのを持ってするから、してついてきて下さい」と言った。 すると、からを持った日本兵が出てきて、 「！スパイ！」とりながらこの人の首をり、 してしまった。毎日何万というを見てはいたが、 生きた人間が生きた人間の首をるという、こんなにろしいことはなく、言葉も出なかった。女性たちはプルプルえていた。殺された男性の言うことを聞いて逃げようとした人もいたが、日本兵が追いかけてってしまった。

姉のシゲさんの話

日本兵が出てきて、「こんながいるから沖縄は戦争に負ける」と言い、ふんどし姿の人の首をってしまった。この様子を見ていたはしていた。

ふんどし姿の人の言うことを聞こうと、いていたズボンをごうとしたおじさんがいたが、「ここでズボンを脱ごうとしているがいるね」と言われ、すぐにきなおしていた。

、そのはの山になっていた。死体のお腹はれてもすごかったため、ヨモギの葉をに入れてしていた。私はけがで足が痛いし、そこで死ぬつもりでいた。しかし母は私に「歩け」と言い、私が「どうせ死ぬんでしょ」と言うと、「あんたが死んだら(私も)ここで死ぬよ。やなわらばーが。生きても死んでもね、おでもだよ。あんた一人死んで、どうやって生きるか」と言われた。

アメリカ兵はこの様子をで見ていたが、助けようがないと思ったのか、やなどでしてきた。私たちはめてギーザバンタのをり、の岩のにれた。戦後に子どもや孫たちをその場所に連れて行ったが、どのようにしてあんなをりていったのかわからない。とにかく「でかれるよりは」という思いだった。人間は追いつめられるとすごい力が出るものだといまだに思う。

**の呼びかけとでった**

では水はだったが食べ物がないので、アメリカ軍が捨てたれの食べ物やレモンの皮、パンの耳などをって食べていた。

ところが2、3日経つと、陸はジープ、海はから毎日朝昼晩、「出てこーい、出てこーい。心配なーい」 としい声でを呼びかけるアナウンスが聞こえるようになった。初めは「出るまい」と思っていた。しかし3日目くらいからはにえられなくなり、でされた自分と、「生きたい」「食べたい」という人間ののが始まった。何も食べていないので一週間目ぐらいからはも見るようになった。

その時、姉のシゲさんは…

その後、沖縄の女性のをった日本兵に出あい、彼は私の母に「おばさん、アメリカ軍はをさないから、になりましょう」と言った。このときアメリカ兵はビラをからばらき、手をげて海岸に出るよう、マイクでアナウンスしていた。この日本兵は、ハワイの人からかにを聞いたということだった。

平和学習ワークシート　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　年　月　日

沖縄戦の時、・シゲさんはどうやってきったのか

６年　　組　　　番

名前

考えてみよう：もしあなたが、長方さん、シゲさんだったら

瑞慶覧さん一家は、海岸で追いつめられています。長方さんは「皇民化教育で洗脳された自分と、『生きたい』『食べたい』という人間の本能の」をしています。シゲさんは、母が「沖縄の女性の着物をった日本兵に出あい、彼は私の母に『おばさん、アメリカ軍は住民を殺さないから、になりましょう』」と言われているのを聞いています。アメリカ軍は、毎日やさしい声でを呼びかけています。

　もし、あなたが、長方さん、シゲさんだったら、どうしますか？

　①　アメリカ軍の捕虜になる

　②　アメリカ軍の捕虜にならない

　③　その他（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

その理由

今日の授業をうけて、疑問に思ったこと、もっと知りたいと思ったことを書きましょう。

【その後どうなったか】

**長方さんのその後**

誰かが「出てみようか」と方言で提案し、を決めた。

岩の間から出て、最初に会ったのは日系二世のアメリカ兵だった。顔立ちが自分たちと似ているので、「兵隊さんもになったんですか？」と聞いてしまった。次に黒人兵が出てきて私たちは連れていかれた。の中には白人兵がいた。

そこでは私と同じくらいの年頃の少年がけがの治療を受けていた。崖で足にできた小さな傷が、 一週間ほど経つと大きなとなってを持ち、ウジ虫も湧いてしかかっていた。そのウジ虫をピンセットで取りながらしていて、「アメリカ兵は話に聞いていたような人たちではないな」 と思った。

での生活

は具志頭村、（現八重瀬町）にした。舟艇を降りるとアメリカ兵から水をもらった。カルキでされた水だったようだが、それまで井戸水しか飲んだことがなかったので、されると思ってみんなき出した。 そこからトラックで玉城村當山の仮収容所へ連れて行かれた。そこではのレーションのがあり、チーズやバター、チョコレート、ビスケットなどがセットになって入っていた。チーズは食べたことも見たことも無かったので、「ったものを！」と思い、またアメリカ兵のことを疑ってしまった。

當山では軍人と民間人が分けられ、そのまま一泊した。日本兵の中には沖縄の人の着物に着替えて民間人になりすましている人もいたが、そこでばれていた。逆に、学校の体育の先生やの先生が軍人だと間違われることもあった。 大里第二国民学校の高学年の先生だった辺士名チョウコウ先生はとても規律正しい方で、軍人に間違われて百名収容所へ連れていかれた。しかし私の同級生五、六人で、アメリカ兵に「この人は僕たちの学校の先生で兵隊じゃなかった、早く出して」と二回ほど言いに行き、された。

當山からは徒歩で玉城村百名まで移動した。本来なら知念方面に行くことになっていたが、百名には知り合いや字の人がたくさんいたので、玉城村百名に入ることになった。 百名ではギボさんという人の屋敷の敷地内に住まわせてもらった。そこには二〇世帯ほどいたと思う。私たちは後から捕虜になり、アメリカ軍からの支給も不十分だったため、 段ボールや板切れなどを使い、仮小屋ともいえないものだったが、住みかを造った。

学校は青空教室で、収容所の巾から戦前に教員をしていた人を集めて教育が始まった。午前中は授業を受け、午後は同級生を集めてし、食料を探しに行った。玉城村志堅原にあったアメリカ軍の兵舎から食べ物をもらったこともある。与那原には台風でしたアメリカ軍の船があり、 海底にって卵や缶詰、毛布などを戦果として持ち帰った。

**シゲさんのその後**

元々、になると女はされる、耳や鼻を切られると言われてされていたが、日本兵の言うことを信じて出ていくことにした。そして、6月25日にギーザバンタ（現八重瀬町）でになった。

百名収容所へ

　捕虜になってからは、見た目が日本人で日本語を話しているが、服装が日本兵でない兵隊がいてびっくりした。「僕はアメリカの兵隊だよ」と言っていた。白人も初めて見たが、青い目をしていて怖かった。『水を飲みなさい』と言われたが毒が入っているかもしれないと思って飲まなかった。黒人も見たが、唇だけが赤く、こちらも初めて見たので怖かった。

　それから捕虜になった人たちは海岸に集められ、水陸両用戦車に乗せられた。「そのまま海に沈められる」と思って泣いている人もいた。しかし、到着したのは港川（現、八重瀬町）の海岸で、そこからトラックで玉城小学校近くのキャンプ（収容所）まで移動した。そこに一晩泊まり、煮物を食べさせてもらえた。

　親戚とも再会し、翌日には徒歩で玉城村百名へ移動した。捕虜になることを進めてくれた日本兵も百名にいたが、彼はの中に入れられていた。戦後、この日本兵にあえないかと思って毎日新聞に投稿したが探し出せなかった。

百名ではおじさん達が造っていた仮小屋や、焼け残っていた民家(十七世帯が入っていた)に収容された。大きなガジュマルの下にを敷いて寝たこともあった。住む場所がないので、みんな山の中に小屋を造っていた。

百名収容所には一ヵ月ほどいたと思う。弟二人(長方、チョウシュン)は百名初等学校に通ったが、学校と言っても畑の中での青空教室だった。

百名には学校以外にも診療所や警察署があった。けがの治療はアメリカ軍の診療所で、濱松病院の医師が行っていた。

（瑞慶覧長方、仲程シゲ証言は、「南城市の沖縄戦　証言編―大里―」南城市教育委員会（2021）に掲載されている。P.183-P.202を参照。）